

ピアノグループレッスンにおける学生Aの変容過程

—保育者養成課程での実践を通して—

小栗祐子

(東海学院大学人間関係学部子ども発達学科)

要 約

本稿は、保育者養成課程一年生であり、入学とともにピアノを学び始めた学生Aにとっても、ピアノグループレッスンが有効に機能し変容が見られるのか、学生Aの演奏や思考にどのような変容が見られるのかについて実践を通して明らかにするものである。保育者養成機関でのピアノ指導については、教員にとっても学生にとっても多くの課題が指摘されており、今日的課題に即した研究が必要となっている。そこで、まず、拙稿において、学生のアンケート分析・考察からグループレッスンの有用性を明らかにし、さらに、本稿ではこのレッスン形態における個の学びの過程を見ていくことで、グループレッスンの在り方について検討することとした。

その結果、ピアノ初学者においても、ピアノグループレッスンにおいて学生が自ら思考し、試行錯誤しながら自分の表現したいイメージを伝えるための技能を獲得していく姿が見られ、グループレッスンは初学者に対しても有効に働くことが明らかとなった。そして、グループメンバー間での音とイメージを結びつけるような対話や、楽曲や音と音楽の構成要素や文化的背景などを結びつけたり、思考を促したりする教員による問いかけ、また、様々な弾き方を比較する試し弾きの場、演奏や発言に対する共感的応答や価値づける発言などが重要な役割を果たすことも明らかとなった。

キーワード：ピアノグループレッスン、初学者、イメージ、表現、対話

I 研究の目的と方法

1. 問題の所在

これからの時代の保育者には「自律的に学び姿勢を持ち続け、自ら資質能力の向上に向けて努力を惜しまない新たな課題に対応できる力を付けること」が求められている¹⁾。このような保育者の資質能力の向上についての課題は、「養成段階からの現職段階への一貫した理念のもとで人材育成することが不可欠」²⁾とされている。つまり、保育者養成校における授業では、学生が主体的に学びに向かう姿勢や課題解決に向けた思考判断力などを重要視した内容であることが求められていると考えられよう。

しかしながら、保育者養成校におけるピアノ指導について、小林は、「技能向上のための授業が古くから今なお続いており、音楽大学における演奏家養成スタイルともいえる教員から演奏方法を教わる技能伝授型の個人レッスンの形態が多い」³⁾という。本校においても同様であり、主にピアノを専攻とする教員による個人レッスンが長年続いてきた。この現状についても、「保育者養成の音楽実技は演奏家を目指す指導とは大きく違いがある」⁴⁾

と指導者側の課題も指摘している。

また、ここ数年の本校入学生のおよそ7割がピアノ未経験者である現状のように、学生のピアノ経験の有無についても大きく変化してきていることから、ピアノを初めて習う学生(ピアノ初学者)に対するピアノ指導の研究は喫緊の課題となっている。

そのような中、近年、技能伝授型の個人レッスンに代わりグループレッスンでの取り組みやその成果が報告されてきている。小林も、「保育者に求められる資質は音楽技能だけでなく、幼児と音楽でコミュニケーションできる力である」⁵⁾と言い、その力をつけるためには、学生が幼児役になったり保育者役になったりすることで、相手の存在を意識することができる「グループレッスンの導入が有効である」⁶⁾とする。しかし、報告されているグループレッスンは、大学3、4年生などでさらにピアノを弾くことにさほど困難を感じない学生を対象にしたものがほとんどであった。

このような現状を踏まえ、本校においても、「幼児音楽I」の授業検討に取り掛かり、ピアノレッスン形態を一

部改編し、個人レッスンとグループレッスンを併用する授業を試みることとなった。そこでは、グループレッスンにおいて、学生は、「楽しく意欲的に練習にも取り組めたり、授業の中で新しい発見ができたり、メンバーとの対話を通じたかかわりの中で他者を意識して弾いたり、思考を働かせて試行錯誤をしながら表現を工夫できていた」⁷⁾ことが明らかとなり、一定の授業改善の効果が見られる結果が得られた。しかし、これは学生へのアンケートからの分析、考察であったため、グループレッスンの有効性については、改めて学生の学びの過程を個の姿に着目することで明らかにする課題が残っていた。

2. 研究の目的と方法

(1) 研究の目的

そこで、本研究では、保育者養成課程1年生であり入学とともにピアノを習い始めた学生Aにとっても、ピアノグループレッスンが有効に機能し変容が見られるのか、初学者Aの演奏や思考にどのような変容がみられるのかについて明らかにすることを目的とする。

(2) 研究の方法

研究方法は、実践的方法をとる。

まず、保育者養成校におけるピアノ教育やピアノグループレッスンについての先行研究を概観し、保育者養成校でのピアノグループレッスンの環境構成や教師の役割について示唆を得る。そして、得られた示唆を基に、保育者養成課程1年生の3名とのグループレッスンの実践を行い、学生Aの演奏表現が変化を見せた場面を取り上げ、どのように変容したのか、そしてその変容の要因について分析し、考察する。

なお、学生には、本研究の趣旨・目的について事前に説明をし、個人情報保護をはかるためのデータ保管の徹底や使用に当たっては個人が特定されないことなどの規定に則った倫理的配慮について同意、了承を得た。

さらに、本研究に関しては、東海学院大学倫理委員会に申請を提出し承認を得ている。【承認ID：2018-19】

II 先行研究

1. 保育者養成校におけるピアノ教育

(1) 新海節 (2012)

新海は、保育者養成校におけるピアノ教育においては、「『保育における音楽』と言う視点が根幹に据えられるべきだ」⁸⁾と言う。つまり「保育者として、子どもたち

の感性に訴えかけることのできるピアノ演奏表現技術の習得」⁹⁾がねらいであり、練習曲などを多用したピアノ演奏の技術的側面を中心とした指導ではなく、学生自身の音楽性や音楽的感情表現を養うことのできる指導の必要性を訴えている。

つまり、学生自身が、音楽から何かを感じたり、演奏によって自分の感情やイメージを伝えたりすることのできるピアノ指導が求められると考えられる。

(2) 衛藤晶子 (2015)

衛藤は、実践的指導力育成の観点からピアノ指導について述べている。その中で、ピアノを用いた時の実践的指導力を「ピアノを媒体として、知覚・感受したことを基に音楽表現をつくり上げることのできる力」¹⁰⁾と定義し、「学生各自がイメージしたことを表現する力を養うことに視点」¹¹⁾をおき、「演奏に必要な音楽の構成要素、演奏法を指導内容と設定し、知覚・感受する場面を取り入れた授業展開を行うこと」¹²⁾を提案している。

つまり、ピアノでの演奏は、学生自身がイメージしたことを表現することがねらいとなり、そのために、レッスンにおける教師は、音楽の構成要素や演奏法を知覚・感受させる場を重要にした授業をつくる必要があると言える。

2. ピアノグループレッスン

(1) 中村愛 (2014)

中村は、グループレッスンの意義を「複数人が言葉を通して相互に学び合い学習していること」¹³⁾とし、他者との対話を通じたグループレッスンによって、学習者は自ら考え、試行錯誤し表現を工夫して技能面の修得にまで至った経緯を明らかにしている。

つまり、他者と意見の交流をすることで学習者の思考が働き、それが試してみたいという欲求を生み、考えながら演奏を繰り返すことで技能の修得につながると言える。

(2) 中村愛¹⁴⁾ (2015)

中村は、対話によるグループレッスンにおいて、楽譜がメンバー間をつなぐ道具になると言う。それは、話題になっている箇所について、音楽の諸要素の関連や歌詞とのつながりを視覚的に明確に把握でき知覚・感受の補助的な役割になるということである。さらに、対話で相手に考えを伝える時には、楽譜がコミュニケーションを促す役目をもつということである。よって、指導者は積極的に対話の内容と楽譜とを一致させるよう促すこと

が効果的であるという。

つまり、対話での気づきや関心事を消えてしまう音だけに拠ることなく、楽譜という共通の媒体を用いて共有することで、より対話の内容も深まるということである。

(3)真鍋香織¹⁵⁾(2003)

真鍋は、グループレッスンにディスカッションを導入することで、学生の音楽的感受性が引き出され、作品の捉え方に変容が見られたという。それは、最初、学生は曲の形式的側面に関心をもつ傾向にあったが、他者の解釈を知ることによって自分の解釈・イメージとの相違について考えることを期に内容的側面も含めて掘り下げていったということである。さらに、演奏者独自の解釈が生まれ、自分自身の表現の仕方が感じられる演奏になったという。

つまり、他者との意見交流によって学生のイメージや感情などを引き出すことで、演奏者自身の楽曲に対する向き合い方が変わり、それが実際の表現の変容にまで結びつくということである。

なお、本研究でのグループレッスンについては、中村の「複数人が言葉を通して相互に学び合い学習していること」に拠ることとする。

III 実践授業の分析

1. 授業の構想

上記の先行研究より、ピアノグループレッスンにおいて以下の点を取り入れた授業を構想した。

- ①音楽に対して感情やイメージを伝え合う場を設ける。
- ②音楽の構成要素について知覚・感受する場を設ける。
- ③グループメンバーとの言葉による対話を積極的に促す。
- ④対話の内容と楽譜とを一致させる言葉がけを行う。
- ⑤演奏曲に対して他者の解釈を知る場を設ける。

2. 授業の概要

○科目名：幼児音楽Ⅰ(クラスを2つに分け、ピアノレッスンと楽典講義を前後半に分け行う)

○ねらい：音楽を指導する保育者として、また情操豊かな保育者になるため必ず習得しておかなければならない音楽の基礎(楽典的知識と音楽的知識)及び表現技術の基礎となる音楽の仕組みとピアノ奏法を学ぶ。(シラバスより)

○対象者：T大学短期大学部1年生3名(ピアノ初学者2名と経験者1名)と教員(筆者)

○実施日時：平成29年5月25日、6月1日、8日、15日、22日(全5回、各45分)

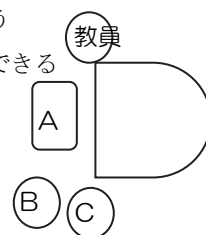
*15回の授業を、2人の非常勤講師と筆者との3人がローテーションで各グループを1クール(5回ずつ)担当。本実践は2クール目。なお、筆者以外の指導者は個人レッスン形式。

*各回、一人の学生が演奏をする時間はおよそ15分弱となる。

○課題曲：ピアノ曲と幼児向けの歌の弾き歌い曲

○レッスン室の環境構成：

演奏をしない学生は、対話しやすいよう演奏者の表情や手、楽譜を見ることのできる位置に座り、演奏を聴いて発言したり一緒に歌ったりもする。(図参照)



3. 授業分析手順と視点

(1)分析対象

抽出学生としてピアノ初学者A(以下Aと示す)を取り上げ、本グループの学生B(以下、B)と学生C(以下、Cと示す)と筆者とのグループレッスンの記録映像やレッスンカルテなどを分析することで、小平の演奏の変容場面を抽出し、その要因を明らかにしていく。その時、演奏の変化とともに、小平の思考がどのように形成されていくのかについて明らかにしていく。

本科目では、バイエルなどのピアノ曲と幼児向けの歌の弾き歌い曲の2種類を扱っているが、本研究ではピアノ曲を用いたグループレッスンについて取り上げることにする。

なお、Aを抽出したのは、Aがピアノ初学者であり、さらに本研究に関わる顕著な変容が見られ、その変容を見取ることのできる分析資料が多く残っていたためである。

(2)分析視点

第2回目(6月1日)のレッスンにおける「教本38番」¹⁶⁾を用いたグループレッスンにおいて、Aの演奏の変化が顕著に見られた場面を取り上げる。まずは初めて演奏した【場面1】、そして、レッスンが進んでおよそ2分半後の【場面2】、さらに約3分半後の【場面3】である。そして、以下の視点で分析をしていく。

【視点a】 Aの演奏はどのように表現され、その演奏がどのように変容していったか。

【視点b】 上記の変容が見られた要因はどのようなことと推察されるか。

【視点 c】 演奏の変化に伴って、思考はどのように形成され発展していったか。

4. 分析

【場面 1・はじめての演奏】

A は、出だしの音を何度も確認して弾き始め、楽譜を食い入るように見れば時々鍵盤を一瞬見てすぐに楽譜に目を戻す動きを繰り返す。速度は 四分音符=92 くらいで、左手・右手どの音も同じくらいの強さのまま一步一步慎重に歩いていくような感じで弾き進めた。拍感を感じられない。弾き終わったら力が入っていた肩をぐつと落とし、はあと息を吐く。表情はあまりすっきりしない曇った様子をしている。

【場面 2・約 2 分半後】

(資料 1 : [場面 2 に至るまでの様子])

【視点 a】 どのように演奏され、その演奏がどのように変容していったか。

24A は、身体には力が入った感じがなく、前後左右に動きがある。左手の分散和音は、手を上下に動かしながら弾ませ、一音一音短く切って弾いている。速度は、四分音符=100 くらいと初めよりもずいぶん速まった。何度も弾き直すことはあったが、全体的に拍にのって弾いているように感じられる。弾き終わった時、微笑むような表情でうん、うんと頷いた。

【視点 b】 上記の変容が見られた要因はどのようなことと推察されるか。

A が弾いた【はじめての演奏】について、8B が「女の子が家でお母さんとおくっつてる感じ」とイメージを発言した。それに対して、10T が「どんな気分で？」と問うと、11B は、「楽しそうに」と言いよりイメージを詳細にした。その時、A は、意見に耳を傾けながら、時折頷いてそうかあ、と考えてるような様子である。また、15C は、「左手を聴いているとなんか楽しそうな感じがするけど、右手を聴いているとなんかのんびりした感じ」と述べ、B の言う「楽しい感じ」に共感する部分と左右の手の旋律の感じ方が違うという自分なりの解釈を伝えていた。

つまり、変容が見られた要因は、A の演奏を聴いて、学生や筆者との間で曲に対する大まかなイメージや左手右手の各旋律に対する具体的なイメージの交流が行われたことと考えることができる。

また、15C は、「楽しい」というイメージについて、それは左手の音にあるのではないかという発言をした。それを受け、18T が、「もっと楽しい感じを出そうと思った時に左手ってどうやって弾いたらいいと思う？」と投げかけると、A はすぐに手首を跳ね上げる仕草をやって見せ、19A 「跳ねる」と答えた。よってそれを試すよう促すと、(22A) 一音一音を手首を上下に動かし、弾ませて分散和音を弾いた。そこで、23T が「さっきどうやって弾いてたっけ」と【はじめて弾いた時】の弾き方を問うと、(24A) 手をあまり動かさず音もやや長めで対照的な動きをしながら弾いて、26A は、「(一直線を描くように手を動かして) サァ——」という言葉でも言い表した。つまり、弾き方の違いを比較しながらの試し弾きによって、その感じの違いや弾き方の違いを認識したと推察される。

【視点 c】 演奏の変化に伴って、思考はどのように形成され発展していったか。

A の思考の中心は、うまく指が動かないことや止まってしまうなどのことであったが、イメージの交流によって他者の解釈を知り、A 自身の中にもイメージが生まれた。C や B によって語られた「楽しい感じ」に共感した A は、直感的にそのイメージを出すための左手の動きをやって見せ、音でも確かめることで、イメージと手の動きの結び付きを認識したのではないか。

振り返りを記述するレッスンカルテには、このレッスンによって初めて「イメージ」という言葉が現れ、さらに、「どのように弾きたいかイメージをもつ」とも記された。

【場面 3・さらに約 3 分半後】

(資料 2 : [場面 3 までの様子]、資料 3 : [場面 3 以降の様子])

【視点 a】 どのように演奏され、その演奏がどのように変容していったか。

48A は、1 拍目を弾く時に身体を少し前に傾け重みをかけて弾いている。それに比べ、2 拍目と 3 拍目は 1 拍目のような重みをかけずにやや軽く触るように弾いている。これは左手の分散和音に顕著であるが、右手の旋律にも同様に 1 拍目には重みがかかる。速度は 四分音符=100 くらいであった。終始、3 拍子を感じて 3 拍子を意識した演奏であった。弾き終わった時に納得したような表情で頷いていた。

〔視点b〕上記の変容が見られた要因はどのようなことと推察されるか。

【場面1】での演奏を終えた後、Aは微笑んで頷いて満足気であり、自分の体を上下に動かしながら32A「なんか体も動く」と言い、身体の使い方が変わったことに気づいた。そこで、36Tが「3拍子って、(中略)西洋の方、ヨーロッパの人たちの踊りの音楽に多く用いられたんだよね・・・」と言いながら、身体を使う踊りに関らせて3拍子の1拍目には重いドレスをグイッと回す時の動きとのかかわりがあるという話題に触れたことで、特に1拍目の捉え方について、42Aはそのイメージをもちながら何度も弾いて試したと考えられる。

つまり、楽曲の特徴である3拍子という音楽の構成要素と文化的背景とを結びつけることで、イメージと奏法をつなげて考えることができたことと推察できる。

また、Aが1拍目に重みのかかった弾き方で試し弾きを繰り返す時、43Tが「(楽譜の2拍目と3拍目を指しながら)これとこれをどういう風に弾く?」と投げかけると、44Aは「軽く」と答えた。この時、弾いていた直後に楽譜上の音符で2拍目と3拍目を視覚的に捉え、1拍目、2拍目、3拍目の弾き方の違いについて、「軽く」という言葉でも確認できたことで意識化され、技能にも結びついたのではないかと推察される。

つまり、消えてしまう音やその弾き方について、視覚化でき言語化できたことで意識化が図られたのであろう。

さらに、演奏中に聞いている学生が声を出すことはないが、BもCも演奏に合わせて身体を動かしたりAの様子や弾き方をしっかりと見聞きしたりしている。よって、演奏が終わるとすかさず表情や仕草で思いを表していた。笑みを浮かべ細かく頷いた48Bや49Tが「どうだった?」と取り上げることで、50Bは「なんか、最初の音は重み(左手で弾くまねをしながら)があるけど、2番目と3番目の音は軽く弾んで・・・よかったなと。」と言うように、Aが弾き方を工夫したことについて丁寧に聴き取り、それを「よかった」と自分にとっても価値高い様子で話した。さらに、55Cが「すごい最初に比べてすごい変わって。」と評価したことで、Aは少し驚くようなうれいような表情を見せた。そしてA自身も、57A「(中略)弾いていて印象、最初に弾いた時とは印象が変わった」と満足な様子を見せた。

つまり、Aの演奏について、グループメンバーによる共感や価値づけが行われたことがAの演奏を変容させた

要因と考えられる。

〔視点c〕演奏の変化に伴って、思考はどのように形成され発展していったか。

左手の分散和音を弾ませて弾くことで「楽しい感じ」を得ていたが、踊りに関わる3拍子のお話を聞くことで、イメージを伴って左手の弾きかたを意識することに思考が向いた。それは、ただ1拍目は強く、2拍目3拍目は弱くというような考えではなく、ドレスを着た人が踊る時のイメージを支えにして、1拍目は重みかけた弾き方にし、2・3拍目は軽く弾こうというようになっていったと考えられる。試行錯誤を繰り返して最終的に納得のいく演奏になったのは、Aの中で音と身体の動き、言葉がつながったからではなかろうか。

IV. 分析結果と考察

1. 〔視点a〕どのように演奏され、その演奏がどのように変容していったか。

初め、終始どの音も同じくらいの強さで鳴らされていたが、3拍子を意識することで1拍目と2・3拍目に強さ(重み)の違いが表れた。特に、左手の分散和音は、やや押すような動きで長めの音だったのが、3拍子を感じながら腕を上下に動かし重みのある音とやや軽く短く弾む音の2種類を組み合わせた弾き方となった。身体の硬さも抜け前後左右に動きながら拍にのって、速度は四分音符=92くらいから四分音符=100くらいへと速まった。

2. 〔視点b〕上記の変容が見られた要因はどのようなことと推察されるか。

- ・曲に対するイメージの交流。
- ・弾き方の違いを比較しながらの試し弾き。
- ・3拍子という音楽の構成要素と文化的背景との結びつけ。
- ・弾き方の視覚化・言語化による意識化。
- ・グループメンバーによる共感、価値づけ。

3. 〔視点c〕演奏の変化に伴って、思考はどのように形成され発展していったか。

Aが本時までのレッスンで振り返っていたことは、「楽譜をぱっと読めるように」「音の長さをカウントできるように」「指くぐりを滑らかにできるように」などという技能面ばかりであった。本時でも指の準備がうまくいかずにミスをしてしまったことに表情を曇らせ、困っ

たこととして発言した。しかし、曲に対するイメージを交流したことで他者の解釈を知り、A 自身にもイメージをもつ機会が生まれた。そして、「楽しい感じ」という意見に共感し、それを実現すべく弾き方を試行錯誤する中で、音とイメージの結びつく経験をして満足感を得たと考える。さらに、3 拍子という音楽の構成要素についてイメージと関らせて考える機会を得ることで、1 拍目の弾き方は重みをかけて、2・3 拍目とは変えようという思考が働き、音を鳴らして試行錯誤する中で、楽譜で視覚的に捉えたり弾き方を言葉で表してみたりしながらイメージを伝える弾き方の技能を獲得していったと考えられる。

V. 結論と今後の課題

保育者養成校でのピアノ指導は、保育現場と切り離されたものであってはならない。それは扱う曲に限らず、子どもという対象がそこには必ず存在し、人と人との関わりの中で音楽が用いられ保育・教育が営まれる。よって、養成校においてもそのような環境での学びが必要ではなかろうか。このように考えた時、保育者養成課程でのピアノ初学者においても、ピアノグループレッスンという形態において、学生同士が関わりながら自ら思考し、試行錯誤しながら自分の表現したいイメージを伝えるための技能を獲得していくことができたことは、非常に意義深いことである。

しかしながら、学生らは、そもそもピアノレッスンに不慣れであることでピアノレッスンに対して緊張感が非常に高く、ましてやグループレッスンの経験はなく、演奏や音楽からどんな感じがするのか、どんなイメージをもったかなどと問われ考える機会にはほぼ初めてであったようである。グループレッスンにおいて重要となるメンバー間の意見交流について、今回は教師がかなり前に出て対話のコーディネートをする形となった。そのような中でも、学生の思考を促し学生同士をつなぐ発問などの工夫が求められる。また、45 分間の持ち時間で、3～4 名の構成員となるグループレッスンのため、一人がピアノを弾く時間の確保は、公平性を保つためにも限られてくる。対話によるグループレッスンでは、意見交流と試行錯誤が行き来し、どうしても一曲にかかる時間が必要となる。何曲も練習して準備してきている学生には消化不良かもしれない。よって、課題曲についての検討も必要となりそうである。これらの課題についても、A

の変容の要因となった点を踏まえた授業のあり方とともに検討していかなければならない。

注

- 1) 保育教諭養成課程研究会(2017)「平成 28 年度幼稚園教諭の養成課程のカリキュラムの開発に向けた調査研究-幼稚園教諭の資質能力の視点から養成課程の質保証を考える-」pp. 1-4
- 2) 同上
- 3) 小林田鶴子(2018)「保育者養成における実技指導・初めに」『学校音楽教育実践論集』第 2 巻, 日本学校音楽教育実践学会, p. 157
- 4)～6) 同上
- 7) 小栗祐子(2018)「『保育表現技術』科目におけるグループレッスンと個人レッスンを併用したピアノレッスンの試み」『東海学院大学研究年報』第 3 巻, 東海学院大学, pp. 79-88
- 8) 新海節(2012)「保育者養成校におけるピアノ教育」『藤女子大学紀要』, 第 49 号, 第 II 部, p. 148
- 9) 同上, p. 152
- 10) 衛藤晶子(2015)「ML 授業における実践的指導力を育成するピアノ指導」『学校音楽教育研究』第 19 巻, 日本学校音楽教育実践学会, p. 214
- 11)～12) 同上
- 13) 中村愛(2014)「保育者養成教育における対話によるグループレッスン」『学校音楽教育研究』第 18 巻, 日本学校音楽教育実践学会, pp. 242-243
- 14) 中村愛(2015)「音楽科の指導内容 4 側面の相互関連における楽譜の扱い-教員養成校の対話によるピアノグループレッスン-」『学校音楽教育研究』第 19 巻, 日本学校音楽教育実践学会, pp. 210-211
- 15) 真鍋香織(2003)「創造的ピアノ教育への試み-ディスカッションによるグループレッスンを通して-」『学校音楽教育研究』第 7 巻, 日本学校音楽教育実践学会, pp. 65-66
- 16) 大学音楽教育研究グループ編(1977)『教職課程のための大学ピアノ教本バイエルとツェルニーによる展開』教育芸術社, p. 41

資料 1 : [場面 2 までの様子]

5T	この曲ってどんな感じがする？Bさん。
6B	(少し笑いながら何度も首をかしげるだけで言葉はなし)
7T	どんな感じ、様子、情景、いつどこでだれが何をしているのかなあ、とか。
8B	<u>女の子が家でお母さんとなんか作ってる感じ。</u>
9A	(発言を聴きながら、あ〜と首を動かしたりして頷いている。)
10T	<u>作ってる感じ！？どんな気分で？</u>
11B	<u>楽しそうに。</u>
12T	楽しそうにね。嫌だよーとかじゃなくてね、あ、料理？
13B	ん？なんか、なんかを作ってる
14T	なにかをつくってる、楽しそうにね。なるほどなるほど。どうですかCさん。
15C	<u>左手を聴いてるとなんか楽しそうな感じがするけど、右手を聴いてるとなんかのんびりした感じ。</u>
16A	<u>(頷きながら聴き、右手についての発言の時は続いて何度も頷く。)</u>
17T	あ、右手と左手ではぜんぜん役割が違うってことね。
18T	左手はズンチャッチャツ(楽譜を指しながら)で楽しい感じが出てるっていつてくれたんだけど、 <u>もっと楽しい感じを出そうと思ったときに、左手ってどうやって弾いたらいいと思う？</u>
19A	(即座に左手の手首を跳ね上げるしぐさをしながら) <u>跳ねる。</u>
20T	おお、ちょっとやってみて。
21B・C	(A を見たり楽譜を見たり、また発言を聴きながら笑ったりする。)
22A	<u>♪ (やや手首を跳ね上げ上下に動かして左の分散和音を弾く。)</u>
23T	<u>さっきどうやって弾いてたっけ？</u>
24A	♪ (跳ね上げず押さえるように左手の分散和音を弾く。)
25T	ちょっと音が？
26A	うん、 <u>(一直線を線を描くように手を横に動かして) サーーと。</u>
27T	あぁ〜とサーとね。ちょっと両手でできそう？
28A	♪ (やや左手を弾ませて両手で弾く。) 【場面 2】

資料 2 : [場面 3 までの様子]

28A	♪ (左手をやや弾ませて両手で弾く。) 【場面 2】
29C	(A の弾き方や楽譜を見て聴いている。)
30B	(膝に置いた楽譜を見ながら聴いて、演奏の終了とともに顔を上げる。)
31T	弾いていてどうですか？
32A	<u>うん、なんか体も (体を上下に動かして笑いながら) 動く。</u>
33B・C	(A の発言をきいて笑う。)
34T	あぁ〜体も動く。伊藤さんもどうやって弾く？そんな感じで弾く？
35C	(うん、と頷き)左手は(小さく左手を上下に動かして)弾む感じ。
36T	これってさあ、ズンチャッチャツってよくあるよね。 <u>3拍子っていうのは、西洋の方、ヨーロッパの人たちの踊りの音楽に多く用いられたんだよね。あの人たち、宮廷の人たち、って何着てる？</u>
37A	(両手をスカートをかたどるように動かし)煌びやかなドレス。
38T	そうそう、ね、煌びやかなドレス着てるよね。昔の人たちのドレスってすごく重かったようで踊るとき、あれをぐりんっと回して、あれだけの重いものを回そうと思うとすごいパワーが必要だったみたい。 <u>そういう音楽に 3拍子って使われてきてるんだけど、そのときに、この一拍目、2拍目、3拍目のちょっと価値が違って、どこが一番重みがくる？</u>
39C	(話しを聞きながら笑ったり頷いたりする。)
40A	1
41T	1。一拍目にうーんチャッチャツっていうように、ワルツの…… そういう3拍子を見たら、ちょっとその拍子の意識をして弾いてみる。どうなるかなあ。
42A	<u>(左手の分散和音を1拍目の音に重みを入れ、1拍目と2拍目の音を繋げて2小節弾く。何回も繰り返し、止まってまた弾き始めてと繰り返し試しながら弾く。)</u>
43T	ズンチャッチャツズンチャッチャツそうそう、 <u>(楽譜を指しながら) これとこれをどういう風に弾く？</u>
44A	<u>軽く。</u>
45T	軽くね。そうそう。ズン チャッチャツズン チャッチャツ この2と3を軽く弾くことで、拍子の感じが出てくるので、ちょっと意識して弾いてみて。
46A	♪ (14:59〜左手の一拍目を重く入れるようにして両手で通して弾く。) 【場面 3】

資料 3 : [場面 3 以降の様子]

46A	♪ (14:59~左手の一拍目を重く入れるようにして両手で通して弾く。)【場面 3】
47C	(弾いている間、A の様子と楽譜を見ながら 3 拍子に乗って身体を前後に動かし、演奏が終わったら、うん、と少し笑顔で頷く。)
48B	(下を向いて(楽譜を見ながら)聴いていて、終わったと同時に顔を上げ、笑みを浮かべ細かく頷く。T と目を合わせ笑う)
49T	どうだった?いま、これは・・・
50B	<u>なんか、最初の音は重み(左手で弾くまねをしながら)があるけど、2 番目と 3 番目の音は軽く弾んで・・・よかったなど。</u>
51T	よかったなと思った。どう感じになった?変わった?
52B	<u>なんか、最初よりかは強弱を付けることでイメージが変わった。</u>
53T	C さんは?
54A	(話す人を見ながら聞いている)
55C	<u>すごい最初に比べてすごい変わってて。</u>
56T	弾いている人はどうだった?
57A	意識することがあってハッてなるけど、(弾いているように鍵盤に手をのせ、動かしながら)でも、 <u>弾いてて印象、最初に弾いた時とは印象が変わった。</u>
58T	印象が変わってる。そうね、どんな風にイメージ変わったってなんかある?(C さんを指して)
59C	ん・・・最初は流れる(てをさらっと横に振って)感じだったけど、最初を大きくすることで、んーなんか、すごい、(A と顔を見合わせ笑い合う)んーーなんか、ワルツっぽい。(うんうんとうなずく)

<小平が用いた楽譜¹²⁾>

No.38

ノイエツェルニーによる

The first system of musical notation for No. 38. It consists of a treble clef staff and a bass clef staff. The treble staff has a key signature of one sharp (F#) and a 3/4 time signature. The first measure has a quarter note G4 with a '3' above it. The second measure has a quarter note A4. The third measure has a quarter note B4 with a '5' above it. The fourth measure has a quarter note C5 with a '4' above it. The bass staff has a key signature of one sharp (F#) and a 3/4 time signature. The first measure has a quarter note G3 with a '1/3' below it. The second measure has a quarter note A3. The third measure has a quarter note B3 with a '1/2' below it. The fourth measure has a quarter note C4. Chord symbols 'I', 'IV', and 'I' are placed below the bass staff.

The second system of musical notation for No. 38. It consists of a treble clef staff and a bass clef staff. The treble staff has a key signature of one sharp (F#) and a 3/4 time signature. The first measure has a quarter note G4 with a '3' above it. The second measure has a quarter note A4. The third measure has a quarter note B4. The fourth measure has a quarter note C5 with a '1/2' below it. The bass staff has a key signature of one sharp (F#) and a 3/4 time signature. The first measure has a quarter note G3. The second measure has a quarter note A3. The third measure has a quarter note B3. The fourth measure has a quarter note C4 with a '1/2' below it. Chord symbols 'I' and 'V7' are placed below the bass staff.

The third system of musical notation for No. 38. It consists of a treble clef staff and a bass clef staff. The treble staff has a key signature of one sharp (F#) and a 3/4 time signature. The first measure has a quarter note G4 with a '3' above it. The second measure has a quarter note A4. The third measure has a quarter note B4 with a '5' above it. The fourth measure has a quarter note C5 with a '4' above it. The bass staff has a key signature of one sharp (F#) and a 3/4 time signature. The first measure has a quarter note G3. The second measure has a quarter note A3. The third measure has a quarter note B3. The fourth measure has a quarter note C4. Chord symbols 'I', 'IV', and 'I' are placed below the bass staff.

The fourth system of musical notation for No. 38. It consists of a treble clef staff and a bass clef staff. The treble staff has a key signature of one sharp (F#) and a 3/4 time signature. The first measure has a quarter note G4 with a '3' above it. The second measure has a quarter note A4. The third measure has a quarter note B4. The fourth measure has a quarter note C5. The bass staff has a key signature of one sharp (F#) and a 3/4 time signature. The first measure has a quarter note G3. The second measure has a quarter note A3. The third measure has a quarter note B3. The fourth measure has a quarter note C4. Chord symbols 'I', 'V7', and 'I' are placed below the bass staff.

The Process of Transformation of the Student A
in a piano group lesson
: Through the analysis of a practice in Nursery
Teachers Training Course
Yuko OGURI